

種々のアンケートから見える生産工学部教員の教育意識

日大生産工 ○山川 一三男

1 まえがき

FD(Faculty Development)推進の一つとして、本学部では「学生による授業評価」の実施について試行し、検討・実施してきた。教育の充実を図るためには、教員の授業に対する最も有力な批判者としての学生から、教育改善に役立つ意見を吸い上げることはきわめて重要であり、それを効果的に授業改善にフィードバックすることが必要不可欠である。現在のような授業評価アンケートは平成16年度より実施されている。このアンケートは継続的な教育改善・教育サービスの一環として重要なものと位置づけられ、学生の批判・要求を知り、授業および教育環境を可能な限り改善し、教育の質の飛躍的な向上をはかるための有益な資料として用いられている。

また、授業評価アンケートの結果をもとに、教員が自分の授業をどのように自己点検し、授業の改善を行ったのか、また今後どのように授業改善を検討していくのかを調査している。

今回、これらの調査結果を解析することにより、生産工学部の教員の教育に対する意識を推測したので報告する。

2 授業評価アンケートからの推測

学生による授業評価アンケートは平成16年度から実施され、平成19年度からは全科目を対象としている。平成23年度においては、実施クラス数は2,059クラス、実施率は96%でほぼ全科目でアンケートが実施されている。また、全回答者数は94,159名で、回答率は75%である。前期の方が実施率、回答率が高い傾向にある。

回答者全員のデータをもとに、各設問の平均点を求めた。設問1～設問6では、「そう思う」を4点、「ややそう思う」を3点、「そうは思わない」を2点、「全くそう思わない」を1点として計算した。図1は設問2「学問や教育に対する(教師の)熱意が感じとれる授業でしたか?」の平均値である。平成16年前期から23年後期までのデータを示してある。ジグザグになっているのは、 Semester制導入により

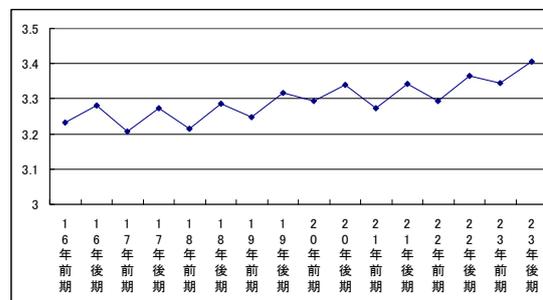


図1 設問2のデータ

前期と後期で科目が異なるためであり、総じて後期の方が高い評価を示している。16～18年度はほぼ同じ平均値を示しているが、19年度からは毎年のように前期、後期とも増加してきている。このようにジグザグしながら増加している傾向は、教員の教育に関する設問である設問1～6において顕著に見られた。また、設問7、8の授業の理解度や満足度も右肩上がりの傾向にあった。

これらのことから、生産工学部の教員は、シラバス通りに熱意を持って授業を行い、話し方や、黒板・機器の利用、学生の参加など授業改善に日々努力していることといえる。

参考として学生の出席状況であるが、設問1～8とは逆に、後期が低い結果が得られた。Semester制を採用し、科目内容にかなり差異がある前期と後期の間に明確な差異が生じ始めたためであろう。家庭学習時間は、設問内容を変えてからかなりの増加が見られた。

3 「授業評価結果に対する教員への調査」からの推測

1) 背景

生産工学部の専任教員および非常勤講師に対して、平成18年度から授業評価アンケートの評価結果を知らせた際、その評価結果を見て今後どのように授業改善を行うかを尋ねた。調査の実施、集計、分析については、教育開発センターが行った。調査票の配布、回収などの事務作業については各科事務室、教務課にお世話いただいた。

The Education Consciousness of C.I.T. Teachers seen from the Various Questionnaire Investigation

Isao YAMAKAWA

授業評価アンケートの実施状況、調査結果に対する予想と評価結果の乖離、今後の授業に対する工夫などについて5段階もしくは3段階評価の質問を行った。また、授業およびFDに関する質問も行った。

回答教員数は、22年度は181名、23年度は203名であった。回答者の所属は9学科1系にわたるが、専門科目、教養・基礎科学科目に関係なく非常勤講師が70名も協力してくれた。生産工学部の専任教員数は213名であり、学生評価や授業改善への関心が高いことが伺える。

2) 授業評価に関する質問

学生による授業評価アンケート結果に対しては以下の7項目の質問をした。①アンケートの実施状況、実施時期、調査項目、②項目ごとのアンケート結果に対する予想、③結果を見ての今後の授業における工夫、④前年度の結果を参考に、今年度の授業で改善・実施したこと、⑤結果のホームページへの公開および記載内容、⑥アンケートの実施科目、⑦アンケートの実施方法である。

①については、全体的な傾向はこれまでとほとんど同じであった。学生は授業評価アンケートに協力的であり、授業中の調査はそれほど障害ではなく、調査時期も適切であるといえる。ただ、依然として教員側は、授業評価が学生に良い影響を与えているとはあまり思っていないという結果が得られている。これは、授業評価結果が学生に公開されていないこと、学生の授業に対する意見への回答を教員側が示す場がないことなど、授業評価結果を有効に活用するシステムを設定していないことに原因があると思われる。

全体的に、これまでの授業評価アンケートにより、何らかの影響を受け、授業改善に努力した結果、②では予想範囲内が一番多く、④での改善への努力の心がけなどが普通程度の評価になったものと思われる。この結果は、教員の授業改善がある程度実を結んだ結果と考えられ、今後新たな展開が必要と思われる。

②において、予想より低いと感じているのが、設問10)の自宅学習についてである。熱心に授業をし、課題など適切に与えているのに、「勉強しないから理解できない」というジレンマを感じさせる結果である。

また、設問9)の出席状況に関しては、教員への調査の自由記述のなかに「授業への出席率の高い学生だけアンケートをできないか」とか「授業アンケートの解析の時に出席率の高い学生と低い学生で分けて処理できないか」という記述があり、出席率の低い学生に授業評価されることに対して教員に抵抗感があることが伺える。

③の教員の今後の授業への工夫に関する質問では、4年間ほとんど同じ傾向にある。教員はすでにかなり努力をしていることを伺わせる。シラバスなどの公開を採用して5年以上立つため、実際の授業に合致するようにすでに改訂しているため、現状で良いという回答が多かったと思われる。

④においては、授業評価アンケートが教員個人の授業改善の意識改革に影響していることが伺える。また、授業評価アンケートが5年程度実施されているため、学生の授業評価を意識して授業をするというより、学生の理解を高める努力に重点を置いて授業改善に努力されていることもみえてきた。

3) 授業に関する質問

「授業で心がけていること」については、「内容のわかりやすさ」を重視し、興味を引きつけるために「内容の興味深さ」が上位を占めた。

「授業改善のために実施したこと」に関しては、「教科書等の再検討」、「学部のアンケートに基づく改善」が高く、他のアンケートも取られ、それにより改善されている先生も多いことがわかった。

「今後、授業改善で実施したいこと」に関しては、「学習意欲を高めるような授業設計・運営の工夫」と「授業中に学生の反応を捉え、理解度に応じた授業」がかなり高いポイントであった。

4) FDに関する質問

FD活動への関心については、65%の教員が少し以上あると回答された。

「FD活動として実施する事項」については、「学生による授業評価アンケート」、「授業方法改善のためのワークショップ」が高いポイントを得た。それに続いて「新任教員の研修」が高かった。

「教育改善のための支援活動」については、専任、非常勤とも「多様化する学生に対する適切な教育指導法」が最も高いポイントを得た。学力レベルの差がますます激しくなっているため、どのようにして授業を成り立たせるか迷っている教員が多いことがわかった。それに続いて、「大学教員として必要な職能、教育力の明確化」および「教育面の業績評価」が高いポイントであった。教員の資格として何が必要かを明確にすることで教育業績を評価してほしいという要望と思われる。これら以外では、専任では「授業時の補助員の援助」とよりよい授業に実施するための支援を希望していることがわかった。

4. まとめ

大多数の教員が「学生による授業評価アンケート」結果を真摯に受け止め、授業改善に日々努力されていることが、改めて検証できた。